

令和3年度第5回「知事と一緒に生き生きトーク」発言要旨

- 1 テーマ：地域を支える産業の振興～産学官連携の取組～
- 2 日時：令和4年1月17日（月） 13:45～15:20
- 3 場所：岡山大学 創立五十周年記念館 2階 会議室
（岡山市北区津島中1-1-1）
- 4 参加者：企業と共同研究を行っている工学系大学生、企業経営者、
大学コーディネーター 5名
- 5 知事挨拶
 - ・企業と大学との共同研究など、産学官連携の経験がある皆様から、産学官連携に必要な取組、課題解決に有効なアイデア、将来展望などについてお聞きしたい。
- 6 発言内容等
 - 【自己紹介】
 - ・岡山大学工学部4年で、情報セキュリティ工学研究室に所属している。データサイエンス部の部長を務め、学内で設立された学生ベンチャーでも働いている。通常の産学連携は、企業と大学の先生が行うものだが、学生から企業へ提案できれば、学生のイノベーションが進展するとともに、学生と県内企業とのマッチングにもつながると考えている。
 - ・岡山理科大学工学部4年で、成形加工工学研究室に所属している。産学連携の意義は、様々な素材の特性に関する知見を持つ大学と、大学で保有していない大型設備がある企業が連携することで、相互にウインウインの関係を築けると考えている。
 - ・岡山県立大学情報工学部4年で、計測システム工学研究室に所属している。企業からの相談を受け、私が研究しているセンサーを用いた高齢者向け車椅子の共同開発に取り組んだ。産学連携をすれば、効率良く企業の課題解決ができると考えている。
 - ・焼酎などの醸造機械メーカーの企業経営をしている。今年で創業89年目だが、この間に機械、微生物に関する知識を蓄積してきた。これを醸造以外の飼料やエネルギーなどに活用していきたいと考えている。当社は50年ビジョンを掲げているが、新しい業態に挑戦するには、当社にはない知見が必要となり、産学官連携が助けになる。
 - ・岡山理科大学研究・社会連携課でコーディネーターをしている。企業との共同研究は、大学の先生にとってもメリットになる。大学としても、地域貢献の一環として必要なミッションである。

【産学官連携に必要な取組、課題】

- ・ 大学の中には、様々な企業に出向いて共同研究をしている先生もいるが、企業との関わりが少ない先生もいる。大学内で共同研究の間口を広げることが重要と考える。企業にとっては、大学とつながる第一歩の敷居が高いのではと感じている。
- ・ 私が共同研究を行った企業はとても協力的で、プレス機器の使用等についても快く対応していただいた。一方で、共同研究に積極的でない企業もあり、大学側への要求ばかりで、企業側が何もしないのでは、大学側も快く受け入れられないと思う。企業側で何ができるかも考えて、持ちつ持たれつのか関係を築くことが大事だと感じる。
- ・ 大学の先生の研究内容と企業のやりたいことが合っていないと、噛み合わない。
- ・ 当社の場合、日々の開発は自社でできるが、長期的なテーマは難しいので、大学等の知見を借りることになる。長期の付き合いになるので、先生との信頼関係が大事である。大学の先生、企業ともに、この研究テーマを社会実装していくという思いがないと前に進まない。そういった先生にたどり着くまでに時間がかかる。長期的な関係を構築できた事例の方が少ない。中小企業は、ニッチな技術に強みを持つところが多いが、そういった技術を大学コーディネーターに理解してもらうのに時間を要することが理由のひとつと思う。トップ同士が関係構築できると話が早く進むので、こういった場を増やしていただきたい。
- ・ 企業のやりたいことと先生のやりたいことが一致しないとうまくいかない。企業の課題解決の中に研究要素が含まれているか、課題が絞り込まれているか、という視点が大切で、相談に来る企業から、それらをうまく引き出さないといけない。大手企業の場合、先生の論文を見てから相談に来ることもある。研究者にとっては、自身の研究が社会実装されることは一番の喜びである。
- ・ 商品化に至るまでには長い時間を要するが、最後まで先生が付き合うことはできない。共同研究のときには大学が担っている部分についても、最終的には企業でできるようにしないといけない。これを実現するためには、人を育てないといけない。企業での人材育成の取組が、次への商品開発につながる。

【課題解決に有効なアイデア、将来展望など】

- ・ イノベーション精神を持つ学生がどんどん増えることが大切である。そうした学生が集まって対話をすることで、イノベーションの種が生まれる。学生は社会経験がないので、社会人とは違った視点で物事を

捉えることができる。学生の突拍子もない考えが、企業の課題解決につながるかもしれないし、起業や中小企業の社内ベンチャーにつながると考える。岡山イノベーションコンテストでは、素晴らしいアイデアがたくさん披露されているのに、まだまだ知らない学生が多い。

- ・ お金稼ぎにきれいなイメージを持っていない学生もいる。お金になるということは、世の中に役立っているものを作り出しているということを多くの学生が認識してほしい。
- ・ 学生の意欲・興味をどう引き出すかが大切である。学生は自身の研究が、企業でどのように活用されているかを知らない。知る方法のひとつとして「おかやまテクノロジー展 (OTEX)」がある。企業のやっていることを直接聞くことができる素晴らしいイベントであるが、開催日が平日で、大学生が講義と重なり行きづらい。土曜日開催だと行きやすくなると思う。
- ・ 他分野の人が集まって話をできる場があれば、発想が広がると感じる。
- ・ 若いときから文系と理系に分かれるが、プロジェクトの推進や社内ベンチャーの立ち上げには、技術的な知識に加えて、財務、マーケティング、営業戦略といった文系知識も必要になる。研究者がこういった知識を学ぶ機会が少ないので、社内において教育制度を整えていきたいし、社外においても、県内の研究者が集って学ぶ機会があれば、イノベーションが活発になると考える。
- ・ 地道な取組を継続することが大事である。国の制度を活用するなどして、ひとつひとつ成功事例を積み上げていくことが重要である。
- ・ 大学と公的機関が連携して社会人教育をする取組は良いことと考える。現在、県の資金により岡山大学で寄付講座を行っており、自身もティーチングアシスタントを務めているが、産学連携の良いきっかけになっている。寄付講座に数年続けて参加している企業が、大学との共同研究につなげられれば理想的である。社会人向けの講座が多くの大学で開講されると、それが産学連携の窓口になる。

【知事まとめ】

- ・ 企業と大学が気軽に相談できる関係を構築できれば、大学の知見の活用、企業の課題解決に繋がりやすくなる。
- ・ 県としても、関係構築に向けた仕組みづくりなど、様々な取組を進めていきたい。